北欧民話の研究の為に（資料11.）

薮　下　紘　一

1．スウェーデン民話研究の為に（資料８.）

（前号をうけて）

ある夜牧夫が眠っていると，小さな妖精の王がベッドのそばに立って，何か言っているような気がした。

「北へ北へ，そこにあなたの妃がいる。」

若者は，それはもう大喜びして，はね起きた。そして目を覚ましてみると，そこにまだ小さい人がいて，「北へ，北へ。」と手で合図していた。

そして小さな爺さんは消えた。若者はそれが本当に彼だったのか，或は目の錯覚にすぎなかったのか，しかとはわからなかった。

次の日早く若者は城館へ行き，国王とじかに話をさせてもらいたいと頼んだ。国王の召使いは皆彼の企てにびっくりした。そして料理番の長が言った。

「あんたは長い年月家畜の世話をして来たのだから，国王とじかに話し合わなくても，きっと給料も食事もふやしてしてもらえるだろうよ。」

然し若者は自分の立場をゆずらす，別の計画を考えているのだと，理解させようとした。

さて若者が広間に来た時，国王は彼の望みをたずねた。

牧夫は深々とお辞儀をして言った。

「私は何年も忠実にあなたにつかえてきました。今度は，王女を探すために旅に出ることを私にお許し下さい。」

国王はわれを忘れて激怒し，言った。

「家畜をつれて牧草地へ行っているお前が，王子達や騎士達に遂行できなかった事を，どうして望むのだ。」

然し牧夫は素直に，王女を探し出し，命を救おうと思っていると答えた。

「うむ」と国王は考えた。「粗末な羊毛地のマントの下にしばしば真紅の心があるものだ。」

そこで国王は，牧夫に馬と武器を与え，その他必要なものをやって，武装するようにと命じた。

だが牧夫は出発にさいして提供された物は，総て持って行く気はなく，国王に言った。

「馬に乗っていくより歩いて行く方が私には合っています。ただ陛下のお許しと食べ物のたっぷり入った袋をください。」

牧夫は自分の欲しい物をもらい，国王は旅行がうまく行くようにと望んだ。然し下男達や下臣達はみんな牧夫とその試を笑いものにした。

牧夫は，妖精の爺さんがそうするようにと言った，北を目指して旅をした。そしてたいそう長い道のりを歩いたので，この世の終わりまで来てしまったのではないかと思われる程だった。彼はこうして深い山を越え，人の住んでいない所を歩いて旅をしたが，そうするうちに大きな湖に出た。湖の中央に美しい島が一つあり，その上には，彼が前に住んでいた城館よりもずっと大きな国王の館があった。若者は岸辺へとおりていき，湖をぐるりと廻り，その城館をいたる所から見て調べた。彼の立っている所が館を見るには丁度良かった。水面の向こうにある館がよく見えた。そして金色の髪をした美しい娘が一人いるのに気がついた。彼女は一つの窓の内側に立って，王女の小さな羊が首に巻いて使っていたのと同じ様な絹の帯で彼に合図していた。すると若者の胸は高なり，窓の内側にいる娘が王女その人であることがわかった。彼は岸辺に坐って，あの大きな王の館へどうやって行けばよいか考えてみた。しかし何も良い考えが見つけられなかった。とうとう彼は，こうなったら小さな妖精達が自分を助けてくれるかどうか，試してみようと思いついた。持っている小さな骨でできた笛をとり出し，長く尾をひくような音を吹いた。

「今晩は。」，とすぐに牧夫の後で声がした。

「やあ今晩は」，と若者は言いふり返った。するとそこに小さな少年が立っていた。それは彼がある時草原でガラスの靴を見つけてやったあの少年だった。

「何かご用ですか。」と少年は言った。

「私を向こうにある城館へ，湖をわたって連れて行ってくれないか。」

「私の背中に乗りなさい。」と妖精の少年は言った。そしてそれと同時に少年は大きな鷹に変身して牧夫を背中に乗せて，湖水を越えてとんだ。

それから若者は城館へと歩いて行き，働かせてもらいたいと頼んだ。

「じゃあお前に何ができるかね。」と厨房の長がきいた。

「家畜を連れて牧草地へ行けます。」と牧夫は答えた。

「それなら歓迎だ。」，とその長は言った。「この城館に住んでいる巨人は丁度，牧夫を必要としているところだ。そして他の連中とうまくやれるならあんたは職にありつけるだろうよ。自分の命にも価する家畜を見失ってはいけないよ。」

「これは又厳しい条件ですね，」と若者は言った，「でも私は申し出をありがたくお受けします。」

そこで厨房の長は彼によろしくと頼み，翌日から仕事をはじめてくれるようにと言った。

さて若者は巨人の家畜を連れて牧草地へ行った。そして自分で作った歌をうたい，いつもするように，自分の鈴を鳴らした。そして王女は窓のそばに坐ってそれをきいていたが，彼が窓の下を通っていくと牧夫が自分を知っているのを，他の人に気付かせないようにと，彼に合図した。夕方には牧夫は森から館へ再びブラブラ歩いて帰って来た。

その時巨人が彼の所へやって来て言った。

「家畜が足りないのではないか。」

然しいくら巨人が計算しても，家畜は一匹も逃げていなかった。

そこで巨人は親切になって言った。

「一生わしの牧夫でいてくれないかね。」

巨人はそのあと岸辺へおりて行き，自分のうっとりさせるようなすばらしい小舟の綱をほどき，いつも夕方そうするように，島の囲りを3回ぐるりとこいでまわった。

巨人が湖の上で舟をこいでいる間，王女は窓のそばに立って歌った。

夜に夜に，牧夫よ。
月が私の星から昇る時
来るのですよ。私はあなたのもの，
私の冠はあなたにあげます。

牧夫はこの歌をきいて，夜になったら，王女の所へ行って救い出してくれ，ということだとわかった。彼は何かきいたとさとられぬようにその場を去った。夜も遅くなり，みんな眠っていたので，彼はこっそり塔に向かって歩き，王女のいる部屋の窓の下に立って歌った。

夜あなたの牧夫が待っていて，
柵の下で悲しんで立っている。
さあおりて来て，私のものになりなさい，
闇が広くおおっている間に。

王女は窓から身をのり出してささやいた。
「私は金の鎖でしばられています。こちらへあがって来てこの鎖をはずして下さい。」
こうなったらもう彼は小さな笛をとり出す以外なかった。長く尾をひくような音をかなでた。
「今晩は。」とすぐにある声が彼の後ろで言った。
「やあ今晩は。」と若者は言いふり返った。そこにはあの小さな男の妖精が立っていた。若者が前に鈴と小さな骨でできた笛をもらったあの妖精だった。
「何が望みかね。」とその爺さんは言った。
「あなたが王女と私をここから連れ出してはくれないかと思って。」
「ついて来なさい。」と小さな爺さんは言い，若者の前を歩いて，王女がとらわれ錠を下ろされている小さな部屋に坐っている塔へと向って行った。扉がひとりでに開いた。そして爺さんが鎖にさわると，鎖ははずれてばらばらになってしまった。それから3人は湖の岸に向かって急いだ。
そこで小さな妖精の爺さんが歌った。

葦の中の川鱒よ行かねば，
来たれ来たれ大急ぎで。
お前の背に王女が乗るのだ，
その上とても大胆な国王もな。

その瞬間，小さな妖精の少女がやって来た。彼女の帽子を牧夫が緑の草原で見つけてやったあの少女だった。彼女は湖の中ですぐにぴょんとはねると，大きな曲線を描きながら水面で泳ぐ大きな川鱒になった。
「さあ急いで川鱒の背に乗りなさい。」と妖精の王が言った。「でも王女は何がおころうと怖がっ

てはいけませんよ。そうしないと私の力が無駄になるから。」

爺さんは消えた。そして牧夫と王女は彼が言ったとおりにした。川鱒は波をつき抜けて急いで先へ進んでいった。

これらの事が行われている間に巨人が目を覚まし，窓から外を見た。すると牧夫が若い王女といっしょに波を越えて進んでいく様が見えた。巨人はすぐに大きな鷲に変身して彼等のあとを追って飛んだ。然し川鱒が鷲の羽根のバタバタする音をきいて，水の中深くへもぐった。王女はとてもおそろしくなって大声で叫んだ。すると妖精の王の力がなくなってしまい，巨人は二人の逃亡者を爪でつかんだ。この様にして巨人が城館に帰って来て，牧夫をおよそ十五ひろの深さの土牢に投げ入れ，他方王女を塔の小部屋にとじこめた。そして彼女が下へ来られないように注意深く見張りをたたせた。

若者は今や巨人の作った深い土牢にいれられ，がっかりしてしまった。王女を救い出せなかったし，人生を役に立たない事に浪費してしまったのだが，そう思っている時突然妖精の王が言ったことをおもい出した。「三回目に危険なことに出会ったら，笛を折ってこわしてしまいなさい。そうしたら私がやって来てあなたを助けましょう。」牧夫はいずれにしても自分が日の目を決して見られないと知っていたので，小さな骨の笛をとり出し，ばらばらにこわした。

それと同時に「今晩は。」と彼の後ろで声がきこえてきた。

「やあ今晩は。」と牧夫は言いふり向いた。

そこには小さな爺さんが立っていて訊ねた。

「今度はどんな願い事かね。又私を呼んだね。」

「ええ，王女を助け出して彼女を父王の所へ連れていきたいのです。」

すると爺さんは彼を自分の方へひき寄せた。そして彼等は秘密の扉を通り，又多くのすばらしい部屋を通った。最後に彼等は大きな広間に来た。そこにはあらゆる種類の武器があふれていた。剣，槍そしてきらきら輝く鋼鉄の斧など。この小さい爺さんは炉に火をたきながら若者に「服を脱ぎなさい。」と言った。牧夫は服を脱いだ。妖精の王はこの服を焼いてしまった。それからこの小さな人は大きな鉄の箱の方へ行き，高価な武具をとり出した。

それはとても明るい金色に輝いていた。

「着なさい。」と爺さんは言い，牧夫は言うとおりにした。

さて若者が頭のてっぺんから足の先きまで完全武装すると，爺さんは鋭い剣を１本彼の腰にさしてくれて言った。

「この剣で巨人を倒そうという寸法さ。このよろいを着ていれば，巨人が攻撃してきても，そう深手を負うことはない。」

そして牧夫はこの金のよろいを身につけると勇気がわいて来た。生まれつきの王子であるみたいにすばやく体を動かした。そのあとで彼等は再び暗い土牢へと帰っていった。牧夫は妖精の王に助力してくれた事を感謝し，そこで二人は別れた。

その日から巨人の城館は騒々しくなった。巨人は王女との結婚を祝うことにしたからだ。巨人はいたる所にいる身内や友人を招待した。王女は今や本当に素晴らしい結婚衣裳をまとい，金の冠を頭にのせた。それは巨人の母親が持っていたものだった。この結婚を祝って楽しいおしゃべりがかわされ，食事やたくさんの酒が出た。しかし花嫁は結婚を取り消しできずに泣いた。そし

て彼女の涙はとても熱かったので頬の上で火のようにもえた。

さて夜が近づき，巨人が自分の花嫁を控室に連れて行くことになったが，彼は，土牢に長い間横たわっていた牧夫を呼んで来るように，とまず下男を使いにやった。祝い客の一団が牧夫のあわれな最期を見ようとして城館の外に集まっていた。しかし司厨長を先頭に巨人の召使達全員が青年を呼んで来ようとして囚人のいる牢へやって来たが，囚人は姿を消していて，その代わりに剣と槍を持ち，完全武装した戦士が立っていた。それで巨人の召使達はびっくりして向きをかえ，階段を大急ぎで又のぼった。そして司厨長と彼の手下たちや若者たちがとぶようにして城館へとあがっていった。そして彼等の後ろから牧夫が立派な武装をしてやって来た。「こら，たちの悪いトロルめ。」と若者を見た時巨人が叫んだ。牧夫の目がとてもきつくなって，武装した牧夫は巨人をぐっとにらんだ。

「お前が奪い取った美しい王女をめぐって，さあ私と勝負しよう。」と若者は叫んだ。しかし巨人はそれを望まなかった。

それでも若者は剣を抜き，その剣は火炎のように光を放った。それを見た巨人は，この剣でなら，いつか言われたように自分が負けるだろう，と知り，死んだように青くなった。若者は巨人に一撃を加えた。すると彼の胴体から頭がちょん切れた。そして巨人は絶命した。王女は跳びあがり，若者を抱きしめて感謝した。うれし涙が流れた。さて若者と王女がまわりを見廻すと皆んないなくなっていた。結婚祝いの客達は巨人が倒れると，とても驚き，四方八方へと逃げてしまっていたからである。

そこで牧夫は剣についた血をぬぐってさやに収め，王女の手をとり，湖の岸辺へ降りて行った。そこで巨人のすばらしい小舟を湖にうかべた。巨人が毎夕3回自分の島のまわりをこぐことにしていたあの舟だ。その舟で2人は湖をわたっていった。

その時王女は，巨人が前に自分を助けに来た王子達や騎士達をみんな殺してしまった事を若者に話してきかせた。

彼等が故郷の王女の両親の所へ帰った時，みんなの喜びは大きく，歓声は天に届かんばかりだった。そして牧夫は王子になり，王女を妻とした。

こうして彼等は一生幸せに暮した。国王が死んで，王子は彼の全領土を相続した。そして小さな鈴とこわれた骨の笛は今でもこの城館に保存されている。

16　森の女

昔むかし一人の働き者で善良な農夫がいた。そして同じように気立ての良い働き者のおかみさんが彼にはいた。彼等は幸福で暮らしむきもとても良かったし，近所の人達とも仲良くしていた。

然しそうこうしているうちに彼等の良き隣人が死んだ。するとその死んだ農夫の代わりに別の農夫が引越してきた。良き農夫はその農夫にうまい手でいいだけいじわるされた。しばらくすると，この働き者の農夫の所ではあらゆるめぐみが少なくなりはじめた。そして越して来た悪党は毎日自分が良くなるようにせっせと悪さをした。そして働き者の農夫はしだいに貧乏になった。一方では富が増え，他方は富が少なくなった。

この働き者の農夫が貧乏になって，自分の持っているものを一つ又一つ売り食いしてると農場

には，最後には，老いた馬と老いた牛一頭ずつしか残らなくなってしまい，それでも彼は喜んで貧乏に甘んじ，それに耐えた。然し悪党は，よりけちになり，進んで他の人を助けようとせず，それで一層富が増えた。そうだ，彼はとてもけちで，最後には恩知らずになった。それでみんなは彼のことを，もとの名前であるアンナシュ・ポールススンの代わりにアンナシュ・スノールスン（けちの息子），と呼んだ。

さてこんなある日のこと，この働き者の農夫は自分の馬と牛が両方共いなくなっているのに気付いた。彼は外に出て荷馬車をはしらせようとしたが，自分の馬がどこへ行ったかわからなくなった。その時牛もいなくなっているのに気付いた。そして彼はまっ暗な夜だったけれども森へ行ってみた。だけど馬も牛も見つからなかった。空がしらみはじめた時，彼は深い森の中へとやって来た。そしてとうとうトロルの山と呼ばれている，大きな石の山へとやって来た時，大変疲れて，石の上に横になり，すぐにぐっすり眠ってしまった。

眠りからさめて目をこすった時，彼は少しの間目をとじていただけだと思った。それと言うのも，彼のまわりがとても明るかったので，まぶしくて物がよく見られなかったからだ。そして彼は全く自分がどこにいるのかわからなくなった。石の山は姿を消した。そして高いすばらしいりんごの木，なしの木そして桜桃の木が彼のまわりに立っていた。枝にはたわわに実がなっていた。実は中空にたれさがっていた。そして珍しい花々が辺りにとても良い香りをただよわせていた。そして大きい鳥や小さい鳥たちやたくさんの種類の動物が彼を見ようと集まっていた。たいそう不思議そうに彼の囲りに坐っていた。鳥たちはそれぞれ自分のメロディーをかなで，枝にとまってとても楽しそうにさえずっていた。それで彼はとてもうれしくなり，自分の馬や牛を失ったことを忘れてしまった。そうなのだ。自分の妻や腹をすかした子供達に与えるものも持っていなかったのに。彼はとても楽しくその辺りの地面を見回した。それで彼は元気になり，先へと進んでいった。そして以前には見たこともないようなすてきないちご類やりんごをそこで見つけた。そして小川は，輝く泉の様になり，輝く池へと先をきそって流れていた。空は彼の頭上にとても明るくひろがっていて，まるで彼の心を写しているようだった。そして突然彼は自分が天国にいるような気になった。そこで彼は膝をついて神に感謝した。

自分がこの様な光栄にあずかったので，彼は神を賞め賛え，忠誠を誓ってから更に先へと歩いて行った。するとガラスのように透明な巨大な家が見えて来た。門は開け放たれていた。然しその前の真ん中の高い高い椅子の上に，頭に木の葉の冠をのせた，一人の女性が坐っていて，木の葉は風に揺れてあちらこちらへと動いていた。彼女の服はすべて本物の花でできていたし，手にはガラスでできた笏を持っていた。そして彼女の前の緑色の石の脚がついた高いテーブルの上に，弓と矢が置いてあった。又その下には一群の残忍な狼共がいた。この農夫が門に向かって行くと，彼女は彼に合図をし，森に響く鈴のような声でたずねた。

「ここに何んの用事ですか。」

それで彼は恐ろしくなったけれども，馬と牛を探しているのだとすぐに思い出して，言った。

「私は貧乏なかわいそうな人間で，馬と牛を一頭ずつしか持っていません。そしてその二頭が逃げてしまったんです。昨日の朝以来探しているのですが，わずかの足あとも見つかりませんでした。」

「私の犬たちは馬と牛に手をつけていません。彼等が卓の下で静かに横になっているのが見える

でしょう。でも私は二頭がどこにいるか知っています。明日あなたは無傷な二頭を見つけるでしょうよ。」と森の女はそこに坐ったままで言った。「そしてあなたが私の庭にある果物やいちご類に手をつけなかったのですから，あなたは一生おいしい食べ物をもらえるでしょう。ここの扉のそばにまるくて赤い石が一つあります。それを持っていきなさい。そしてあなたが家へ帰った時，それを張り出した玄関の扉の所の地面に埋めて下さい。あなたがここから少し行くと，天にもとどくかと思うほど大きな松の木が１本見えて来ます。その下にはちょうどふるいにかけたように大きな大きな松かさが落ちています。その中から一つをとりなさい。森へと通じる門へ出たらそこの内側の右手に大きな砂山があります。それを手いっぱいにひと握りとり，左のシャツのポケットに入れなさい。そして農場へ持ち帰る途中で，持っている松かさを小さな森の中で投げなさい，砂は小さな農場へ行く間にひとつまみずつまき散らしなさい。そうしてから自分の小屋へ行き横になって眠りなさい。朝になったらきっとあなたの家畜が又手に入りますよ。」

「大変ありがとうございます。」と農夫は言い，自分がもらったものは本当にすばらしい贈り物だと思った。

そこで彼はその場を去り森の女が言ったとおりにした。総てその通りにした。

この農夫が門を出て森の女の立派な庭園へ行き，森へ入った。森の中は本当にまっ暗になった。然し彼は又自分に運があるように感じ，うまく家にたどり着いた。それから贈り物をそれぞれ分け，中へ入いり，ぐっすり眠っている自分のかわいそうなおかみさんのそばに横になった。麦わらを敷いた小屋のひと角に横になっていたが，子供達もそうしていた。大変疲れていたので農夫もぐっすり眠った。

彼がたっぷり眠った時，おかみさんが彼のそばで目を覚まし叫んだ。

「父さん父さん，おきなさいってば。私達がどこにいるのか教えてくれない。」農夫がベッドの上に起きあがった時，彼は自分の目をこすり，何を見たのか理解できなかった。小屋は人形を飾る棚のように立派だし，窓も以前の小さいのとは違って大きかった。一対の石でできた杯と幾つかの石でできた食器の代わりに，棚はとてもきらきら輝く錫や銅の容器でいっぱいになっていた。そして以前には古い一枚の板でできた食卓と小さな食器棚しかなかった所に，窓と窓との間に，大きな大きな柏の木でできた棚があった。そこで二人共立ちあがって，はでな飾りものを全部観察した。

「神様，じゃあ子供達はどこですか。」とおかみさんは叫んだ。

まず驚いた事には彼女が子供達の事をあやうく忘れる所だった。彼等が中に子供達が見えなかったものだから，入口へすっとんで行った。然し農夫が入口の前の建物の真向いにある小さな部屋の扉を開けると，そこでは子供達が，きれいなきれいなシーツの敷いてある，とても質が良くて暖かそうな毛布をかけてあるベッドですやすやと眠っていた。

それで母親は小部屋からとび出し，もう一つの小部屋の扉をぐいと開けた。するとそこも他の部屋同様新しくてきれいだった。そしてそこには，以前日曜日に着る何枚かのぼろ服がかかっていたのとは反対に，両親と子供達用のすごく立派な新しい服がいっぱいかかっていた。家全体が，かまどや壁やその他総て新しいもので，まるでたった今建てられたかのようだった。

彼等が玄関の前の建物の扉をあけると，小さな中庭が，以前はそこに生えていなかった新しいきれいな花々で，みずみずしい緑になっている様が目に入った。そして砂をまいてある道路は緑

色に塗られ，両側を新しい柵でかこまれた枝折り戸へと通じていた。そして森が家の囲りに高く，見あげるように立っていた。その両側には畑があり，その前の方ではすばらしい収穫物が揺れていた。この小さな農園にはたくさんの実のなった果樹がそびえていた。

彼等がふりかえってみると，そこには新しいペンキを塗った二棟の馬小屋と家畜小屋がみえた。二人はそこへも行ってみた。おかみさんは先に走って行って農具の置いてある部屋へ通じる扉をあけた。するとそこでは，彼女の囲りに子羊が集まり，メーメーとないた。農夫が家畜小屋をひらくと，そこには9頭のたっぷり乳の出る牛がいた。

「あーあー，なんと。」と農夫は思い馬小屋へといそいだ。そこには6頭の美しいよく肥えた馬と3頭の立派な小馬がいた。その他に，前からいる馬がいななき，前からいた牛がモーモー鳴いていた。そしてその馬も牛も物おじし，おずおずして，事情がわからない様子だった。

それから農夫はおかみさんと一緒に小屋へ入っていった。二人はうれし泣きし，こんなにたくさん良い事をしてくれたので，神に感謝した。二人は教区全体の中で一番の金持ちの農民よりももっと金持ちになった。

さて，みんなにアンナシュ・スノールスン（ケチ息子）と呼ばれている男が朝小屋の外へ出て来た時，隣人の栄えている様を凝視し，自分の目をこすり，又そこにある総てのものを見つめ，とるに足らない農民が一夜にして総てを新しくし，こんなにたくさんの穀物と果物を手に入れるなんて，どういうことになったのか，とぶつぶつ言いながら，あれこれ考えてみた。そして以前は他の者よりも暮らし向きが良かったのでとても高慢だったが，今はひどく不満だった。然し彼はいら立ちをしずめ，この隣人にわざと下手に出て，薄笑いをうかべ，どうしてこうなったのかとたずねたり，あらゆる可能な方法やり方を知ろうと試みた。心中では彼は，これは魔法だ，と思っていた。そして，どうしてかと彼がたずねると，人の良い農夫は，とうとう，どうして総てがうまくいったかを話してきかせた。

アンナシュ・スノールスン（けち息子）は大急ぎで家へ帰り，ちょうど馬小屋にいた馬を外へ出し，家畜小屋にいる他の動物を外へ出し，それらを森に向かって追いたてた。そして自分のおかみさんの所へ行き，どうやって自分が振舞ったらいいかわかった，と話してきかせた。隣人より更にたくさんそろえ，立派になり，暮らし向きがもっと良くなると。

「どうしてあんな人間に行けたのかな。」と彼は叫んだ。「いやわしは出発し，同じ道を行くが，奴とは別の団子をものにするだろうよ。」

そう言って彼は帽子をかぶり斧をもって森へ急ぎ，トロルのいる山へと道をとった。そこでは彼は辺りをあちらこちら，行ったり来たり，少しずつ少しずつ行ったが，暗くなるのを待つだけだった。

まさに太陽が沈みはじめた時，彼は石の上に身を横たえた。然し彼は好奇心が強く，又とても心配だったので，意識の方はちゃんと覚めていた。眠りたかったが，なかなかねむれなかった。そこに横になって夜おそくまでまどろんでいた。

そして一度，永く永く目をおさえて目を再び開けた時，彼の囲りはとても明るかった。丁度もう一人の農夫が，そうなった，と言ったように。石の山は姿を消していた。そして高い立派なりんご，なしの木とさくらんぼの木が彼の囲りに立っていた。大枝や小枝は果実でいっぱいで，地面近くまでたれていた。然しそれを見てもアンナシュ・けち息子はうれしくなく，最も多くのも

のを，あらゆる種類の物を，彼は望んでいた。そしてそれらの非常に珍らしい花々は空中にとても良い香りをただよわせていた。然しそれを彼は何も感じとらなかった。たくさんの大小の鳥たちが，様々の動物が，彼を見つけると集まって来て，不思議そうに彼の囲りに坐った。だけど彼はそれらをシーシーと自分の囲りから追い払った。鳥達はそれぞれ自分のメロディーを歌い，枝にとまって楽しそうにさえずった。でも彼はそれに注目しなかった。彼はどうしようもないので食べてばかりいた。明るい池の中へと続いていた明るい丘を彼はどぶように走り越えた。彼は魚釣りをせず，釣竿をもって来なかったので，腹が立った。こんなにたくさんの銀色の魚が一ヶ所にいるのをこれまで見たことがなかったからだ。彼の上にある空はとても明るかったが，（彼自身を写し出すどんな鏡もなかった。）そして人間の為にこんなすばらしいものを創ってくれた神様の事は考えなかった。

だから門も今はあいていて，すきとおって見える家まで速く着くように，どんどん歩いて行った。すると頭に木の葉の冠をかぶった一人の女が高い椅子に坐っている所に出た。冠の木の葉は風でゆれていた。それに彼は気付かなかった。そして花でできた衣服とガラスの笏を彼はポカンと口をあけて見ていた。然し弓と矢が何んの役に立つかが彼にはよくわかった。緑の石の脚部の上に置いてある高い卓の所へ彼がやって来ると，その下には残忍な狼の大きな群がいて，ほえて彼に向かって牙をむいたので，彼は恐しくなった。

「ここに何んの用ですか。」とその女性は牧夫の角笛のような鋭い声でたずねた。

「私は近くに住んでいるアンナシュ・ポールスンといいます。私の所から逃げ去った馬と家畜を探しに来たのです。」

「私の犬達はそれらにまだ手をつけていません。自分自身の家畜を追っていたのだから狼達の口に入らないように注意しなさい。さもないとあなたも牧草地の番人も食べられてしまいますよ。私の犬達はまだ静かに横になっています。でも家へ急いで帰りなさい。あなたの馬と牛は小屋のそばの野原にいます。そしてあなたが招待もしないのに，私の果物をたっぷり食べた後だから，私は何もあげません。」

「ああ，親愛なる方よ。私の隣人が昨日もらった程たくさん私にも下さいな。そうすれば，とても満足するのですが。」とその農夫は頼んだ。

「じゃあわかったわ」，と森の女は言った，「あなたもそれならもらわなくては。ここの扉の所にある赤い石の一つをとりなさい。そして家へ帰ったら，その石を玄関口の扉の所の地面に埋めるのですよ。そしてそこから少し離れたところにある高い松の木のそばに，大きな松かさが一面にまき散らされた所があります。そのうちの一つをとっていいです。そして森へ通じる門のそばには，内部の右手に大きな砂山がありますから，そこから砂ひとつかみとりなさい。それを左のセーターのポケットに入れます。そして松かさをあなたも森に向かって投げます。砂をひとつまみ畑と小さな庭園にまき散らせなさい。そうしておいて，自分の小屋へ行き横になって眠りなさい。でも私の言った事を最低守りなさい。そうするとあなたは一生それを覚えているでしょう。約束します。」

「それはどうもありがとう。」とアンナシュ・スノールスンは言ってその場を去った。

然し，言われたのとは反対に，赤い石を一つとる代わりに，セーターのポケットいっぱいとった。そして松かさを一つとるどころか背にしょっていた弁当袋にいっぱい取った。更に一つまみ

の砂ではなく，左のセーターのポケットいっぱいにとった。そして暗い森の中をわが屋へと急いだ。たくさんとれば，もっとたくさん手に入るだろうと思ったから，自分の隣人が森の女が許可した以上にはとらなかったので，何んて馬鹿なんだ，とほくそえんだ。

「結構だ，と言うことぐらいは知っているさ。彼女が貧欲だとよくわかっているつもりだよ。これでみんなが，アンナシュ・ポールスンがどういう人間かすぐにわかるだろうさ。ハハハ。」

笑い声は森の中でおそろしく響いた。それで彼自身ぎょっとした。

しかし家へ帰ってきて，自分のおかみさんのベッドの所へ行き，彼女に向かって言った。

「さあ気をつけろ。明日の朝早くにおれたちがどれだけ多くの物を手に入れるかわかるだろうよ。」

彼が少しの間横になっているとき、石と松かさが二つ共まだ森の女が言ったようにしていないのに気がついた。そこで彼はとび起きて外へ出なければならなかった。石を全部玄関の扉の所に置き，弁当を入れる袋に入っている松かきをとり出し，森へととび込んで行って，一握りずつ四方八方へ投げた。そして砂は左のセーターのポケットに入っていたが，畑と小さな庭園にまき散らした。

そうしておいて家へ入り，おかみさんのそばで又寝たが，眠れなかった。そして彼女もそうだった。二人は横になっていたが寝苦しくて，寝がえりをうったり，くるりと回転したりした。そしてトロトロとまどろんだ。時おりちらちらと上の方を見たが，どういう事になるかは理解できなかった。二人が待っていたすばらしい事はなかなかおきようとしない。彼等にできる最良の事といったら，小屋全体をゆすることだった。だけどそうすれば小屋がこわれてしまいやしないか。それで彼等はそこに横になって前と同じ様に待っていた。

とうとうおかみさんが言った。

「あんた。私はどうなるかわからない。今日はまだ始まっていないけれど，みてごらん。あそこの屋根の所では星のような物が輝いている。」

「黙って黙って，静かに横になっていろ。そうすればどうなるか，恐らくわかるだろうから。」

然しそれは全く不可能だった。全く思った通りには行かなかった。

とうとう彼等は寝ているのに疲れてしまった。床の上に起きあがってみると，窓が苔でふさがれており，小屋全体が半分ひっくりかえっているのに気付いた。小屋は扉を通って出るようには立っていず，農夫は煙突を通って外へ出なければならなかった。然し彼がそこをあがっていくと，とても驚いたので，息が首の所でとまってしまった。丁度小屋の前に高い高い山が苔におおわれてそびえていた。そして大きくなって，小屋をひっくり返して投げ出したのはこの山であった。畑は恐ろしく大きな乾いた砂丘になっていた。そして森の木は全部枯れてしまっており，木の下の地面はたくさんの松かさの山におおわれていた。

彼はおかみさんを助け出す為に屋根に穴をあけなければならなかった。彼女は嘆き悲しみ，子供達が逃げ道を通ったかどうか，と言って泣いた。彼等が家畜小屋へ行ってみると，家畜の脚だけが横になっていた。そしてある仕切の中では家畜の子が腹を減らして泣いて横になっていた。馬小屋でも同様で，苦しんでいて，馬草の置いてある納屋も他の建物も，以前の家敷とは違っていた。

然し善良な隣人がこの悲しい様を見聞きすると，彼はスノールスン家を自分の所に引取り，食事をさせた。そして彼等は隣人の小作人になるのを許してもらい，その助力を受けた。然しアン

ナシュ・スノールスンは決して自作農になる事はなかった。

17　カラスの肌色のマイサ

昔ある所にとても美しい王妃のいる王がいた。彼は自分の命の様に彼女のことをとても好いていた。

然し彼等が楽しく喜んで永い間一緒に生活していたところ，王妃が病気になった。彼女は日毎に様態が悪くなっていった。それで王は大いに不安になり，そして苦しくなり，彼女が死ぬのを待つばかりとなった。

王が心配と心痛でおろおろしていると，王妃から使いが来て，王に自分の所へ来て，死ぬ前に彼と話がしたい，と伝えた。彼が行ってみると彼女は疲れにつかれていた。それで王は妃の言う事を何んとかききとれる程だった。然し王妃が王の手をとり，彼に自分の言うことをきくようにと頼んだ。再婚しない様にと。たとえ自分とそっくりであっても，たとえ妃と同じ様に美しい王女が見つかったとしても，と。そしてこれは王も同じ様に思っていたから，自分の王としての宣誓として約束した。

こうして王妃は死んだ。喪に服す年月が過ぎると，廷臣達は王が再婚する事を望んだ。彼等は王に様ざまな美しい王女を描いてある，魅力的なたくさんの肖像画を見せた。しかし彼はそれでも，どんな王女も妃にする気はなかった。

この様にして時間が過ぎて行き，廷臣達はそれでも再婚するようにと王にしきりにすすめた。そして長々と彼等が小言を言うと，この王も時折，もう結婚しようかともらし出した。それも彼自身の娘と。というのは彼女は，何んでもできた母親にとても似ていたからだ。

「ごもっとも。」と廷臣達は言った。しかし彼等は，それは良くないと思った。むしろ他所の王女を妃にしたいと思った。

その娘は，自分の父が自分と結婚したいと望んでいる，と知って，とても恥しい気持ちになり，泣きはじめ，目もとび出さんばかりに泣いた。そしてこの事を防ぐ為にどうふるまったら良いのか全くわからなかった。

しかしどれくらい永い時間時間かせぎをしたか。とうとう最後に良い考えを見つけた。彼女は挙式するまでに王が彼女に３つの事を約束してくれるようにと頼んだ。王は娘の望みをすべて受け入れると約束した。そこで彼女は３着のワンピースが欲しいと頼んだ。まず最初は銀色の服を，次に金色のものを，そして最後に真珠の服を。しかし既製のものを手に入れるのはそんなにはやくにはそろえられず，結婚式はおよそ一週間から二週間延期された。

とうとう，王女は総ての服を手に入れた。そして結婚式の為の日程が決められた。そこで王女は頼んだ。自分の為に服を一着仕立ててくれと。ちょうど式が行われようとしていた時だったが，王は温和な人だから承知した。その服はまじりっけのないからすの毛皮でできていた。それに合せて同じものでできたふち無し帽を欲しがった。その上にはからすの頭をつけさせた。服と帽子の両方を彼女は手に入れた。王は彼女が恐ろしくなった。それでも王は彼女の部屋の前に見張を立てた。

しかしその見張りは役に立たなかった。夜になって皆んながベッドに入ってしまうと，王女は侍女を見張りの所へ行かせ，強い香辛料の入った一リットルのワインをやった。すると見張りは

眠ってしまい，王女はとても珍らしい服を着て，侍女を連れて城館からこっそり出て行った。そして海岸へとおりて行った。海上には美しい船が出帆の用意ができて待っていた。その船は前もって彼女がそこへ廻しておかせたもので，それに乗って彼女は，遠い遠い国へ向かって航海した。

それから式の日が来て王とその娘が結婚することになった。しかし侍女達が朝王女に花嫁衣装を着せようとして部屋に行ってみると，王女はそこにいなかった。そこで王は言い知れぬ不安にかられ，家来をありとあらゆる大路小路に探しにやった。王女を無事見つけた者には多額の報酬をやる，と書き記した。ところが彼等は皆彼女を見つけだせないでむなしく帰って来た。

とかくするうちに王女は隣国へと航海した。そこには彼女が前に会ったことのある王子がいた。彼女はその王子が好きだった。そして王子も彼女が好きだった。さて彼女がそこへ着いた時，船を岩の間に泊めようとした。岩がとても高いので，船は岸の方から離れてみても見えなかった。そこで王女は上陸した。身につけている派手な飾り物は全部，海から少し離れている黒い森の中に隠した。しかしからすの肌色の服は着たままだった。それから彼女は王の城館めざして歩いていった。

王女が城館に着くと，厨房へ入って，自分にできる事が何かあるか，とたずねた。

「いや，」と料理番は答えた，「必要な人間は何んとか間に合っている。だけどあんたは自分の事をとてもきれいに話す。だから石炭運びの役になってもらって，それを外から厨房に運んでもらおう。だけどあんたはひどく醜いから城館のまわりで姿を他の人に見せてはいけないよ。石炭は皆んなが起きる前に，朝早くに台所へ運んでくれ。もし廷臣達が，あんたがどんなにいまわしく見えるかを知ったら，しかられるのは私だから。」

彼女がそこに少しの間いてから，料理番に，日曜日の朝教会へ行かせてもらいたいと頼んだ。

「あそこで何を祈るんだい，醜いからすの肌色のマイサ。あんたが教会から外へ出て来て，皆んなを驚かせたら，私がしかられるんだ。」

「充分に注意して誰にも見られないようにしますから。」とマイサは言った。

「じゃあまあ，そうするんだな。」と料理番は言った。

そこでマイサは急いで森へ行き，侍女を呼んだ。侍女は銀色の衣装を持って来て王女に着せてきれいにし，銀のヘアーバンドを頭につけ，黄色い靴をはかせた。用意ができてマイサが手を三度たたくと，ひずめをならし火器を発射するような鼻息をする元気の良い馬の引くすばらしい馬車がやって来た。そこで彼女は馬車の中に坐り，教会へと出発した。

教会へ着いた時頂度鐘が鳴りわたり，人びとは中へ入った。彼女は大急ぎで広い通路を先へと進んでいった。そして王子の真向かいの長椅子に坐った。若い王子は彼女から目をそらすことができなかった。そしてみんなは彼女が誰で，どこから来たのかと不思議がった。然しお祈りが終りそうになった時，マイサは急いで教会から出て馬車に乗った。そして車輪の跡も残さずに立ち去った。誰も彼女に追いつけなかったし，馬車がはやく走り去ったので，彼女がどこへ行ったのかを知るのはむつかしかった。

王子が城館へ帰って来た時，教会にいたあの美しい王女の事以外は，何も話さなかった。そして彼女がどこから来たのかをぜひ知りたいと思った。そして彼は，彼女が恐らく隣の国の王女のようだと思ったので，彼が考えていたのは本当は彼女の事だったと思い到ったが，それを知っている者には言わなかった。もうすこし足しげく教会へ通ったなら，彼女がどこへ行ったか全部知

れるだろうと気付いた。

次の日曜日にマイサは又料理番の所へ行って，教会へ行かせてほしいと頼んだ。前回と同じような返事をもらった。だけど最後には彼女の言葉が彼の心をとらえた。

「じゃあまあそうするんだな。」と料理番は言った。

それでマイサは森へ急ぎ，金でできた衣裳を着，侍女を呼んで，とてもきれいに着つけてもらい，金のヘアーバンドをつけ，足には黄色い靴をはかせてもらった。そうしてから手をたたくと，前回同様，ひずめをならし，火器を発射するような鼻息をする馬が馬車をひいてきた。それで彼女は馬車に坐り，教会へ向って出発した。彼女は広い通路を先へと進んで，王子の真向かいにある長椅子に坐った。このかわいそうな王子は彼女から目をそらせられなかった。そして前に見た時よりも一層彼女が好きになったが，牧師の手前もあって彼女の所へ行って話をしようとはしなかった。お祈りが終わるや否やマイサは急いで教会を出，馬車共どもその場から消えた。そしてできるだけ速く馬車を走らせたので，どこへいってしまったかを見るのに間に合わなかった。

王子は城館へ帰って来たが，とても悲しそうで気分が晴れなかった。それで何日も食事のすすまない日が続いた。そこで王子は，もし彼女が教会へ来た時には，馬で彼女を追いかけるように，と一番はやい騎士十二名に命じた。

三回目の日曜日にマイサは料理番の所へ行き，教会へ行かせてほしいと頼んだ。前回と同じ答えが返って来た。「じゃあまあそうするんだな。」と。

そこでマイサは森へと急ぎ，真珠でできた衣装を出し，侍女を呼んだ。侍女は彼女にその美しくて立派な服を着せ，髪には真珠の飾りのついたヘアーバンドをつけ，足には黄色い靴をはかせた。それからマイサが手をならすと，馬車が前と同じ様に馬にひかれてやって来た。馬はひずめをならし，火を吹くような鼻息をはいていた。彼女は馬車の中に坐り，教会へと出発した。教会では広い通路を歩き，王子の真向かいの長椅子に坐った。その時王子は立ちあがり，自分の長椅子から彼女の方へ行き，彼女の所で話をし，どこから来られたかと訊ねた。然し彼女はハンカチを目に当て，彼に一言も答えなかった。その時，彼女の中指に言い様のない立派な指輪が光っているのが見えた。然し彼には，それ以上は見えなかった。その時牧師が説教台の椅子に坐ってがなり立てはじめた。そして王子が教会の静けさを邪魔したとおどし，それで王子はその場を去り，自分の席に再び坐らねばならなかった。それと同時に牧師は，アーメン，と言った。見知らぬ王女はそこで急いで教会から出て，馬車と共に消えた。十二人の有能な騎士が彼女のあとを追った。土煙をあげて。然し彼女がどこへ馬車を走らせたか見つけられなかった。それ程彼女は速く馬車を走らせたのだ。

王子は王女をつかまえられなかったので残念がり，とても悲しくなった。それで食べたり飲んだりする元気さえなくなってしまった。そうなのだ，もう泣くより他は何もできないのだ。料理番達は，みんな自分の知っている限りのおいしい料理を作ったが，王子はそれでもほんの少ししか食べなかった。こうして王子は衰弱し，見た所死人のように青ざめていた。

ある日厨房に，王子にだけ特別においしいパンケーキを作る様にと命令が来た。「パンケーキだって。」と料理番は言った。「そんなものは前は食べたがらなかったが。」

然し王子はパンケーキが急に食べたくなったのだ。料理番はパンケーキなんて焼くのが珍しかったが，自分の知っている最良のものを作った。だけど王子はそれを又厨房へ返して来て，もっと

おいしいものを作れと料理番に命じた。それで料理番は狼狽し，今度は王子が満足するように作ろうとした。

からすの肌色のマイサがそれらを全部聞いていて，自分が王子の為にパンケーキを焼いてみたい，と頼んだ。

「見て下さい」，と彼女は言った，「王子がこれで喜ばないかどうか。」

「どうしてお前にそれができるのかね，醜いからすの肌色のマイサよ。」と料理番は言った，「だけど，お前が焼きたいのならやってもいいぞ。どうせ同じだけど。いずれにしても王子は食べないだろうよ。」

それでマイサは嬉しくなり，胸元から色とりどりに輝く指輪をとり出し，薪割台の所へ行き，それを真中から2つに割った。そうしておいて，パンケーキを一つやき，その中に指輪の半分を入れ，もう半分は再び胸元にしまい込んだ。

王子がそのパンケーキを手にとり，食べると，マイサが入れておいた指輪の半分を見つけた。王子はすぐに使いを送って料理番に上に来るように命じた。

料理番が来ると，王子は訊ねた。「あのね，誰がここへ運んで来たパンケーキを作ったのかね。

料理番は，あのみにくい少女がそれを焼いた事をあえて言わずに答えた。「私です。殿下。」

然し王子は料理番の顔が青くなったのを見て，自分のキラキラ光る剣を引き抜き，本当の事を言わないと首をはねるぞ，とおどした。

すると料理番は泣きだし，言った。「命ばかりはお助け下さい，殿下。本当の事を，そして起こった事の総てを言います。少し前にここに醜い娘っ子が来ました。その娘は全身にからすの肌色をしていました。だから私達は彼女の事をからすの肌色をしたマイサと呼んでいます。仕事をさせてもらいたいと言って来たのです。本当にひどく醜く見えました。だけど彼女の話はとても活きいきと響きましたので，私は彼女を去らせることができず，石炭運びとしてやといました。でも彼女の事で腹を立てるのに疲れてしまいましたから，彼女をできるだけ遠くへ追い払ってしまおうとしているところです。」

「本題は，料理番。誰がパンケーキを焼いたのかね。」と王子はいら立って言った。「それはマイサです。」と口ごもった。

「それなら彼女を連れて来なさい，すぐにだ。」と王子は言った。

料理番は大急ぎで厨房へとび降りて行って，マイサがかまどのそばに立っているのを見つけると，彼女に握りこぶしをふりながら言った。

「荷物をまとめて，王子の所へ行け。すぐだ，この恩知らずめ。お前が降りて来て，首があったら，決してそれを忘れないように，お前を叩きのめしてやる。」

マイサはあがって行った。王子の前に出ると，彼は彼女のぞっとするような容貌を見てびっくりした。然し彼は自分の見える所へは近ずかせず，それでも親しく親切に訊ねた。

「ここで働いているのかね，娘さん。」

「はい。」とマイサはゆっくりと答えたので，よくきこえなかったが，それでもとても良く，上品に思わせたので，王子はそれでとても驚いた。

「指輪の半分はどこへやったかね。半分はお前が焼いてくれたパンケーキの中にあったが。」

「それは私のです。ここにもう半分があります。」

彼女はからすの肌色の帽子を脱ぎすてた。からすの肌色の衣服も。

すると王子は彼女を又思い出し叫んだ。「アーデリン嬢だ。」

とういうのも，彼は美しいお嬢さんを呼ばねばならない時そう呼ぼうと思っていたからだ。

然し彼が同時に又その人が隣の国から来た王女と知った時は，大そう嬉しくなり，その喜びはもう限りなかった。

そして王子はすぐに，すみやかに式の用意をし，この王女と結婚した。

然し私は結婚式には立ち会わなかった。